

《ガヤガヤ》

（夜の雑踏）

ノラの様子がおかしくなってから数日が経った。

普段は元気な姿を見せてはいるが、時折（ときおり）何処かよそらしく、暗い顔を見せるようになっていた。

貴方は、どうにもそれが気に入らず、最近は何にもしないで仕事が終わる次第、家に帰る事が多くなっていた。

今も、町の近隣に出没したモンスター退治を終えると、打ち上げで盛り上がると思う他の冒険者達の輪から抜け出し、帰路を急いでいる最中であつた。

娼婦

「あらあ？　ねえ、そこのあなたっ！

あ、ほらやっぱり……もう、最近お見限りじゃない？

前はあれだけ来てくれたのに、冷たくて寂しくなっちゃうわ」

だが今日はたまたま、以前から通っていた馴染みの娼婦の娘にばかりと出くわしてしまった。

すまないと思ひながらも、軽く愛想笑いをしつつ避けようとする貴方。

だが、娼婦も良い機会だと思ったのか、ぐいと体を密着させてきて、貴方を逃がさない。

娼婦

「忙しいって、そういう言い訳聞きたくないわ。

……私に飽きて、他の娘に移ったっていうならまだ分かるけど、そういう話も聞かないし

ねえ、何かあったの？ 私……何かしちやったかしら？」

【そういう事じゃないんだが……】

と、思わず言葉を濁す、貴方。

実際、貴方自身にとっても、少女との関係は言葉にするのが難しいものがある。

自分と彼女はどのような関係なのか？

家にくれる彼女に対して感じる安心感、一緒にいると妙に楽しく思えてくるこの気持ちを何と呼べばいいのか。

あまり深く考えた事がなかったために、それを上手く言葉にする事が出来ないのだ。

言いよどむ貴方に、娼婦は脈があると思ったのか、より一層身を寄せ、胸を押し付けるように更に密着させてくる。

扇情的に胸元が肌蹴られたドレス越しに見える肉感的な膨らみとその感触は、何時もながらもとても柔らかく魅力的であった。

《ぎゅう……むにつ》

（腕を絡ませ、胸を押し付ける音）

娼婦

「ねえ、それなら今晚はどう？ 私も貴方が来てくれないと……何だか物足りなくて。

久しぶりだし、私の方から……ね？

サービスさせて貰うからいいでしょう？ ん……ちゅうっ♪」

絡ませた腕に押し当てた胸を押しつけるようにしながら、娼婦の顔が貴方に近付く。

とろりと、近付く髪に混ざって夜の女らしい蠱惑的な香りが貴方の鼻を擦った。

彼女と遊ぶ機会が減ったのも、ただ単純に貴方の都合による所が大きかった事もあり、この熱の籠ったサービスに気持ちが動き、つい……貴方は彼女のキスを受け入れてしまう。

娼婦

「んっ、ちゅう……くちゅ、ちゅう……ぺろっ、ちゅう……ん、ふふ♪
やっぱり、貴方のキスって何だか嬉しくなっちゃうわね♪
ねえ、どう？ 気分は乗ってきてくれたかしら？

この後私時間あるし、少し遊んで……」

ノラ

「え……あ、お……っさん」

《ガタンツ》

（躓くように大きな足音を立ててしまう音）

《ガバツ》

(慌てて娼婦を引き離す音)

娼婦

「あら……あの娘（こ）って？」

ここ最近、ノラの事で気を張り詰めていただけに少しぐらいならば気晴らしでもいいかもしれないと、キスの勢いと娼婦の熱に流されそうになっていた貴方の耳に、突如……ここ暫く誰よりも聞き馴染んでしまった声が響いた。

慌てて娼婦を引き離すと、何故か娼館の裏口のある路地裏の先で、呆然と此方を見つめている少女——ノラを見つけてしまう。

ノラ

「あ、は……あ、いや……あ、そう……だよな？」

お、おっさんだって男だし、こういう店に来る、よな？

あ、そか……はは、そうだよな？

ハ、ハハ……ご、ごめん！ 何か変な所見ちまって！

あ、そうだ、オレこんな事してる場合じゃなかったんだ！ あは、はは

……。

……う、……くっ！！」

《ダッダッダ》

(慌てて駆け去る音)

ノラは、貴方を見つめたまま呆然としていたが、突然顔を歪ませ、小さく笑い、そのまま走り出してしまった。

【待て！】

つと、少女に誤解……誤解でもないかもしれないが、それでも彼女が抱いてしまった思いを否定したくて、貴方は彼女を追おうと駆け出そうとする。

しかし、再び娼婦の腕が貴方に絡み、それを制止した。

娼婦

「ねえ、急にどうしたの？ 何、あの娘、貴方の知り合いなの？」

【そうだ、だから放してくれ！】

貴方はそういい、絡んだ腕を解こうとしたが、思いのほか強い力がそれが阻んだ。

今はそれ所じゃないんだと、つい力つとなり娼婦を睨もうとした貴方は、意外な程真剣な顔の彼女の様子に思わず手を緩めてしまう。

娼婦

「何だか分からないけど、貴方の知り合いで大事な娘なのよね、彼女？ ……なら、本当はダメなんでしょうけど、ちよつと伝えておきたい事があるの。少しだけ時間を頂戴？ 大丈夫、すぐに終わる話だから」

彼女の様子に、思わず立ち止まってしまふ貴方。

それを見て、娼婦は安心したようにしながらもキョロキョロと辺りを見

回し、人気のない方へ貴方を誘う。

そして、首元にキスをするように見せながら、耳元に口を寄せ、そっと言葉を囁いた。

《しゆる……》

（衣擦れの音）

娼婦

「どういう関係かは詮索する気はないけど……気を付けて。

彼女、今日私の店のオーナーに連れられて来られた子なのよ。」

多分……私達の店の新人にするつもりなんだと思うわ。

本当なら、今頃は”研修“の……意味は、分かるでしょう？　そういう事を教え込まされる時間のはずなんだけど、外に居るって事は逃げ出したんじゃないかしら？

……店の沽券にも関わるし、バレたら躍起になって捕まえるはずよ。どうなってるかは分からないけど、兎に角、気をつけた方がいいわ」

突然の言葉に驚き、思わず娼婦の顔を見てしまふ、貴方。

彼女は少し困ったようにしながら、小さくため息をつき、優しげな微笑（ほほえみ）を浮かべた。

娼婦

「別に、あの子のためって訳じゃないのよ？

常連で、お気に入りの貴方が変な目に合わないか……少し心配になった

だけ。

それに……彼女、あんまり自分から望んで来たって感じでもなかったしね。

連れて来られる事自体は良くある事だし、同情はする気はないけれど、まあ……その。

……こほんっ！ 今ならまだ正式に店に入ってる訳じゃないし……あの娘（こ）には、貴方がいるんでしょう？

話を良く聞いてみてあげなさいよ。貴方に何か出来る事があるなら……ひよっとしたら、何か話が変わるかもしれないじゃない？

連れて来られた子って、暫くは辛そうにしてる事が多いし、あんまり見えていて気持ちいいものじゃないし、ね？

……あっ！ この話私からって広めるのは止めてよ？ 知られたらそれこそ私が折檻されるもの！」

困った顔をしながらも、娼婦はそう言い貴方に優しく微笑みかけた。危険を冒してまでしてくれた彼女の忠告に、貴方は強く頷き返し礼を言う。

娼婦

「よしてよ！ 常連を失いたくないだけっていうのもあるんだから！ 時間を取らせてごめんなさい、早くあの子を追いかけた方がいいわ。さ、もう良いから……行つて！」

彼女は照れくさそうに笑い、絡ませた腕を解くと、そっと貴方の背を押

した。

貴方は彼女に再び大きく頷くと、そのままノラが消えた方へと全速力で走り出す。

その背中を何処か寂しそうにしながらも、彼女はそつと見送った。

娼婦

「……はーあ。

良いなって思ってた男に限って、どうしてこう掌（てのひら）から零れ落ちていくのかしらねえ？

まったく、嫌になっちゃうわよ、もう！

……でも、まあ、ああいう一生懸命になれる所を気に入っちゃうんだから……仕方ないんでしょうけどねえ」